

Coxハザードモデルによる解析

Q08S2 普段の親との会話(中学生頃迄)

female only

Q10 親と性に関する会話(中学生頃迄)

Q11 両親の性的なことに関する厳しさ(中学生頃迄)

モデル係数のオムニバス検定**

ステップ	-2対数尤度	全体(時点)			前のステップからの変更			前のブロックからの変更		
		カイ2乗	自由度	有意確率	カイ2乗	自由度	有意確率	カイ2乗	自由度	有意確率
1 ^a	6773.443	12.893	7	.076	11.857	7	.105	11.857	7	.105
2 ^b	6774.226	12.166	4	.016	.783	3	.854	11.074	4	.026
3 ^c	6778.388	7.776	2	.020	4.162	2	.125	6.912	2	.032

a. ステップ番号 1: Q08S2COX Q11COX Q10COX
で変数が入力されました。

b. ステップ番号 2: Q10COX
で変数が削除されました。

c. ステップ番号 3: Q11COX
で変数が削除されました。

d. 開始ブロック番号 0, 初期対数尤度関数-2対数尤度: 6785.300

e. 開始ブロック番号 1, 方法 = 変数減少法ステップワイス(尤度比)

図7. Cox ハザードモデルを用いた性交開始年齢への寄与 (女性)

日本人若年層における性行動の活発化・停滞傾向に関する統計解析

松浦 賢長	福岡県立大学看護学部地域国際看護学講座
樋口 善之	福岡県立大学看護学部地域国際看護学講座
杉村由香理	日本家族計画協会クリニック
北村 邦夫	日本家族計画協会クリニック

北村邦夫分担班が2004年度に実施した「男女の生活と意識に関する調査」のデータを用いて、性行動が若い世代ほど活発化してきているという社会一般に流通する見方を検証するための数量解析をおこなった結果について報告した。若年層の性の活発化について解析を通じてわかったことを以下に示す。

(1) 日本人の若年層において特に性行動が活発化しているというエビデンスは得られず、逆に、むしろ停滞を示すデータが得られた。

(2) 日本人の若年層においては、(経験者中の)過去1か月間のセックスレスの割合は、高いものであった。

(3) 過去1ヶ月間の性交頻度についても、未婚者のみをとりあげた解析をすると、若年層にとくに性交頻度が高いという特徴は消失した。

(4) 1975年前後生まれ世代がもっとも(初交年齢が)低年齢化していて、現在の若年層では、高年齢化の方向に向いているというエビデンスが他の研究(松浦)で得られているが、本研究においても、性行動の活発さにおいて若年層が1975年前後生まれ世代を凌駕しているというエビデンスは得られなかった。

(5) 意識の面においても、若年層の性の活発化を示すデータは得られなかった。逆に、性から遠ざかる傾向を示すデータが得られた。また、性の特別視が低下していることを示唆するエビデンスも得られた。

I. はじめに

本稿では若年における性行動の活発化に焦点をあてる。社会では、若い世代の性行動が低年齢化し、かつ活発化しているとの言説が長らく流布されてきている。少なくとも、若年層における性の低年齢化はみられず、逆に性から遠ざかるものの増加があきらかになっている。この事実から考えるに、若年層における性の活発化というのは一部の現象をさすのであり、総合的にみれば停滞傾向にあるのではないかと考えられる。

本稿では、北村邦夫分担班が2004年度に実施した「男女の生活と意識に関する調査」のデータを用いて、若年層における性行動の活発化という社会一般に流通する見方を検証するための数量解析をおこなった結果について報告する。

II. 対象と方法

2004年度、北村邦夫分担班がおこなった「男女の生活と意識に関する調査」のデータをもとにする。これは、全国無作為抽出による性意識・性行動調査であり、日本人の性行動として代表しうるデータである。

調査対象の抽出方法であるが、全国都道府県の市区町村を単位として11地区に分類し150地点より無作為に抽出して「男女の生活と意識に関するアンケート調査」を満16歳から49歳までの3,000名を対象に行い、回収し得た1,580名(回収率52.7%)のアンケート結果を集計し解析に供した。その内訳は男性690名、年齢は16歳から49歳で平均年齢 33.7 ± 9.1 歳、女性890名、16歳から49歳で平均年齢 34.7 ± 9.0 歳であり、女性のほうに約1歳年齢が高く有意差($p < 0.05$)を認め

た。その5歳階級別の年齢構成分布をみると女性の40歳代がやや多かったためと思われる。

調査方法であるが、調査員が調査対象者宅を直接訪問し、調査票を手渡し、記入を依頼した。記入済み調査票は、所定の袋に入れ、調査員が数日後回収した。個人のプライバシーに十分留意しつつ実施した。

調査項目から、性の活発化に関連すると思われる行動項目と、意識項目について分析していく。今回は男女あわせた結果を出す。

分析にあたっては、10歳階級では世代間の特徴をみるには広すぎるため、5歳階級にくぎった。1955年を中心とした5歳階級(47歳以上群)から、1985年を中心とした5歳階級(22歳未満群)までの7つの年齢階級に対象を分類した。

III. 結果および考察

性行動の活発さに関連する行動項目

1. 過去1か月の性交頻度

性交経験者をとりあげた解析である。過去1か月の性交頻度(多回数)を図1に示した。最若年層の22歳未満群であるが、22-26歳群について、この割合が高いのがわかる。しかし、未婚のもののみについてさらに絞り込んでみると(図2)、他の年齢階級と比較して22歳未満群にこの割合が高いという特徴がみられなくなる。

過去1か月の性交頻度(セックスレス)を図3に示した。最若年層の22歳未満群であるが、47歳以上群について、この割合が高いのがわかる。未婚のもののみについてさらに絞り込んでみると(図4)、他の年齢階級と比較して22歳未満群にこの割合が高いという特徴がみられなくなる。

2. 過去1年間の性交相手数

性交経験者をとりあげた解析である。まず意識項目についてみていく(図5)。性交の相手が変わることへの意識であるが、「重大である」と考えるものの割合は、年齢階級を下るにつれて激減している。

それに対応するかたちで、行動項目の「過去1年間の性交相手数」をみてみると(図6))、「2人以上」と回答したものが年齢階級を下るにつれて増加していることがわかる。

意識と行動が比較的相関する、性行動の中でも

珍しい特性が性交相手数にあるのではないかと思われる。Harvardの研究者の研究(2004)においても、性交相手数(多数)ということに影響する共有環境は0%であり、遺伝と特異環境が奇与の半分ずつをしめているという特性がわかっている。

しかし一方、未婚者だけをとりあげると、まずは意識であるが(図7)、47歳以上群を除くと、22歳未満群では、性交の相手が変わることへの意識であるが、「重大である」と考えるものの割合が決して低くはないことがわかる。

性交相手数への意識は行動と相関していると先に議論したが、この場合もあてはまる。実際の行動をみると(図8)、「過去1年間の性交相手数」が「2人以上」と回答したものが、とくに22歳未満群に多いということはいえないということがわかった。少ない部類といってもよい。

性交相手数には、年齢階級よりも、婚姻状態(未婚であること)が影響していると考えられた。

3. 他の意識項目

「異性と付き合う」という表現にどのような意味合いを感じているかについて、「1人にしぼられた特定の相手との関係」と回答したものの割合を図9に示した。22歳未満群では、これを肯定するものは少なかった。

「セックスをすることに関心があるか」という問いに、「とても」「ある程度」と回答したものの割合を図示した(図10)。22歳未満群では、そう回答するものは少なかった。セックスへの関心の低下がうかがえる。

「実際に異性とかわることに面倒を感じるか」という問いに、「とても」「ある程度」と回答したものの割合を図示した(図11)。22歳未満群では、そう回答するものは少ないとはいえなかった。

はじめてのセックスについて、「重大なことだと感じる」と回答したものの割合を図示した(図12)。22歳未満群では、他の年齢階級に比べ突出して、肯定するものが少なかった。はじめてのセックスへの特別視の低下がみられる。これをさらに未婚のものみに絞り込んで解析したのが図13である。未婚のものみに絞り込んでみても、はじめてのセックスへの特別視の低下がみられることがわかった。

IV. まとめ

若年層の性の活発化・停滞傾向の検証

生理的な観点からすると、若年層の性行動は他の年齢層に比較すると活発であると予測される。上記の解析を通じてわかったことを以下に示す。

(1) 日本人の若年層において特に性行動が活発化しているというエビデンスは得られず、逆に、停滞を示すデータが得られた。

(2) 日本人の若年層においては、(経験者中の)過去1か月間のセックスレスの割合は高いものであった。

(3) 過去1ヶ月間の性交頻度についても、未婚者のみをとりあげた解析をすると、若年層とくに性交頻度が高いという特徴は消失した。

(4) 1975年前後生まれ世代がもっとも(初交年齢が)低年齢化していて、現在の若年層では、高年齢化の方向に向いているというエビデンスが他の研究で得られているが、本研究においても、性行動の活発さで、若年層が1975年前後生まれ世代を凌駕しているというエビデンスは得られなかった。

(5) 意識の面においても、若年層の性の活発化を示すデータは得られなかった。逆に、性から遠ざかる傾向を示すデータが得られた。

(6) 性の特別視が低下していることを示唆するエビデンスも得られた。

過去1か月の性交頻度 「5～9回以上」(経験者)

2004年度全国調査

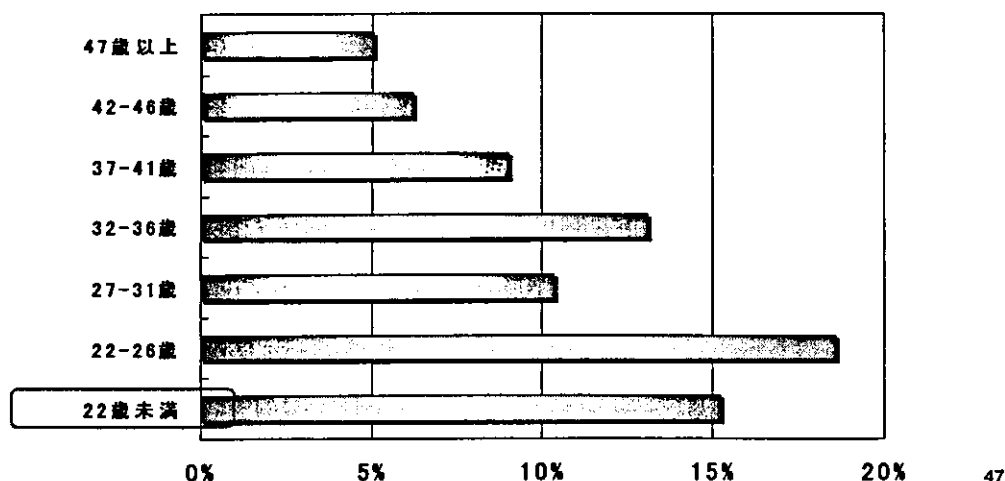


図1. 過去1か月の性交頻度：5－9回以上

過去1か月の性交頻度 「5～9回以上」(経験者:未婚のみ群)

2004年度全国調査

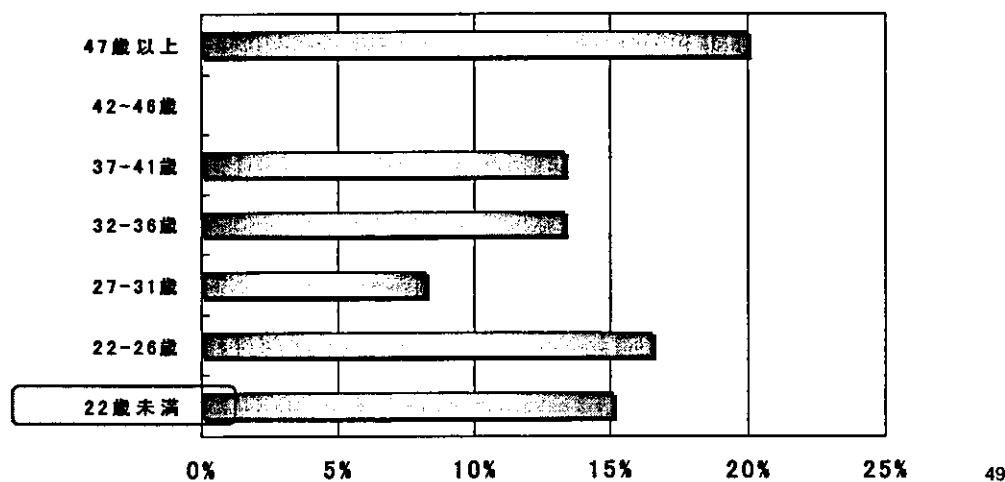


図2. 過去1か月の性交頻度：5－9回以上 (未婚群)

過去1か月の性交頻度 「一度もセックスしていない」(経験者)

2004年度全国調査

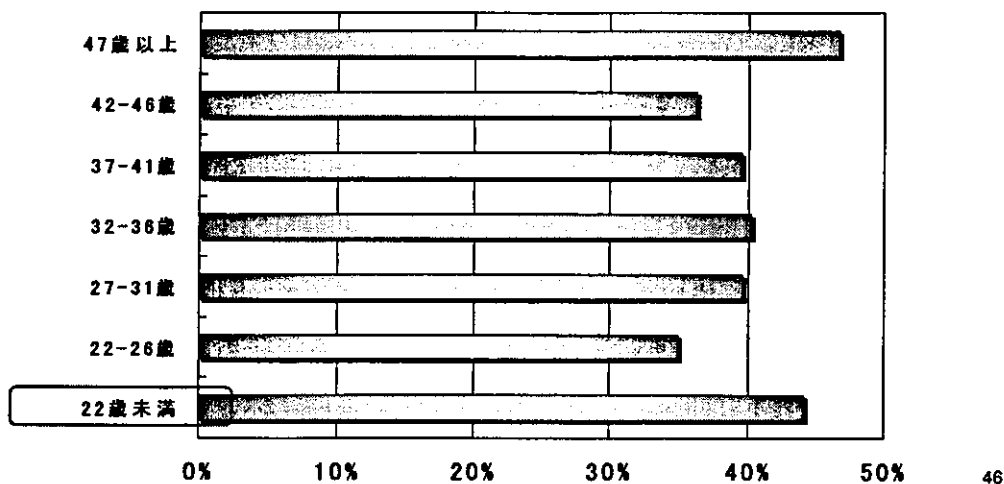


図3. 過去1か月の性交頻度：セックスレス

過去1か月の性交頻度 「一度もセックスしていない」(経験者:未婚)

2004年度全国調査

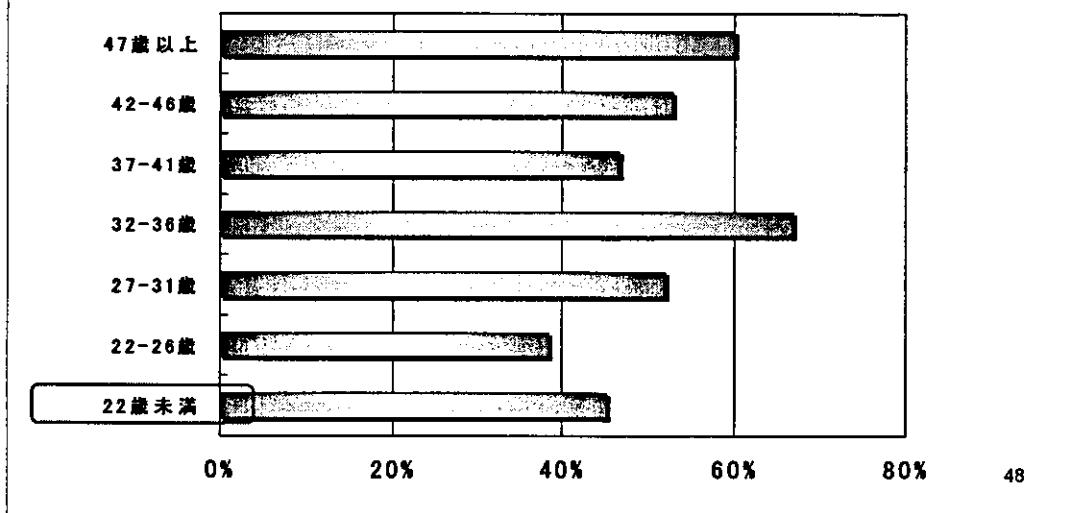


図4. 過去1か月の性交頻度：セックスレス (未婚群)

セックスの相手が変わることについて 「かなり重大なことだと感じる」

2004年度全国調査

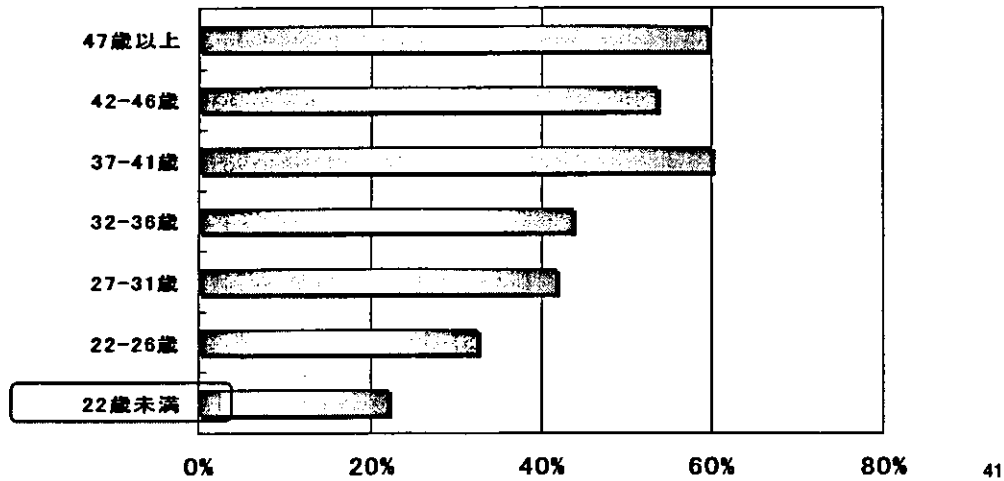


図5. 相手が変わることへの意識「重大なことだと感じる」

過去1年間の性交相手数 「2人以上」(経験者)

2004年度全国調査

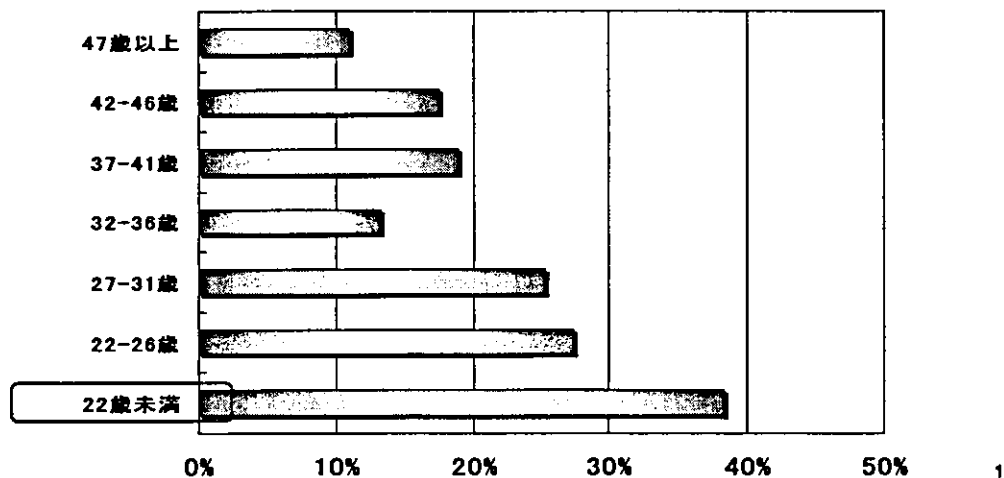


図6. 過去1年間の性交相手数「2人以上」

セックスの相手が変わることについて 「かなり重大なことだと感じる」(未婚者)

2004年度全国調査

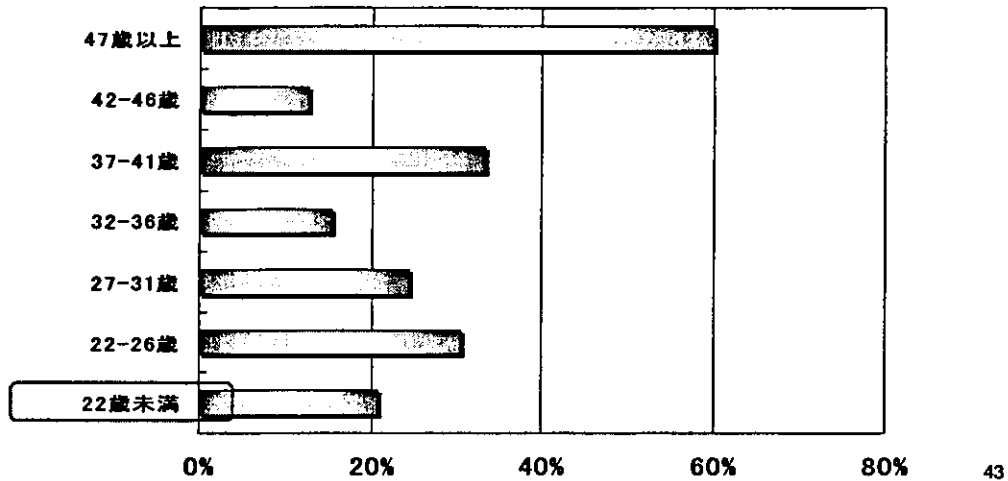


図7. 相手が変わることへの意識「重大なことだと感じる」(未婚群)

過去1年間の性交相手数 「2人以上」(経験者:未婚のみ群)

2004年度全国調査

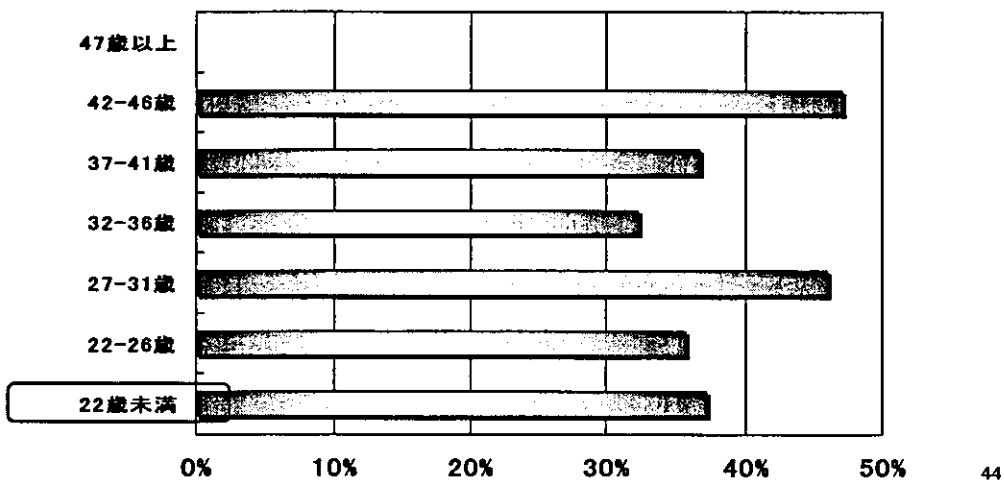


図8. 過去1年間の性交相手数「2人以上」(未婚群)

異性と付き合うとはどういう意味か？ 「1人にしぼられた特定の相手との関係」

2004年度全国調査

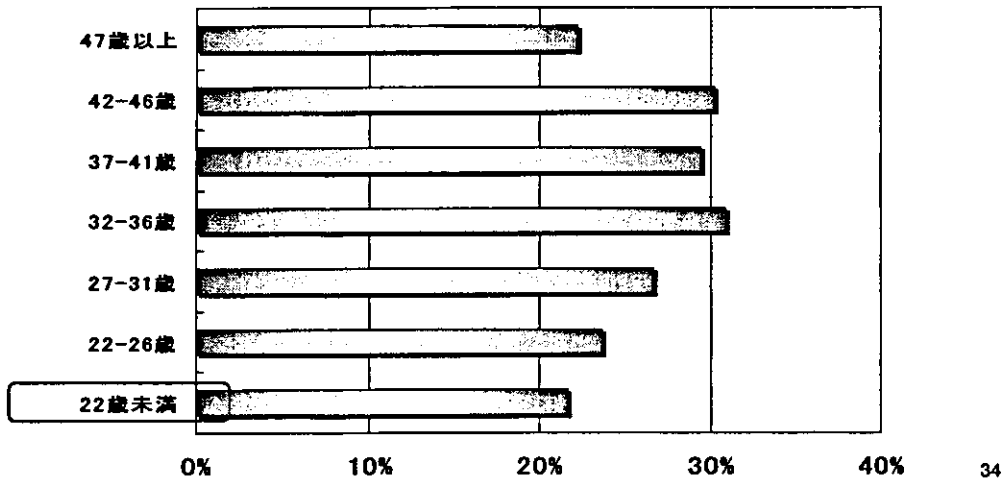


図9. 異性につきあう意味

セックスをすることに、関心があるか？ 「とても・ある程度 関心がある」

2004年度全国調査

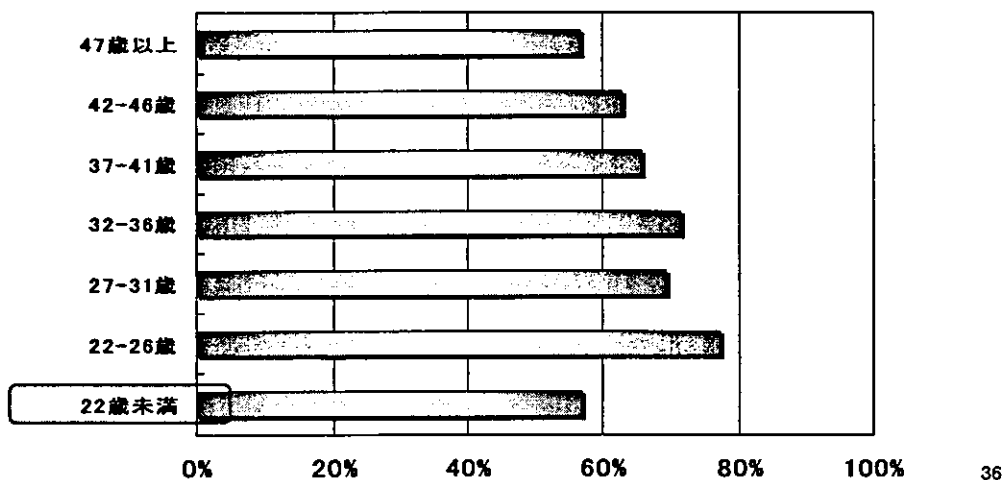


図10. セックスをすることに関心があるか

実際に異性と関わるのが面倒か？ 「とても・ある程度 面倒である」

2004年度全国調査

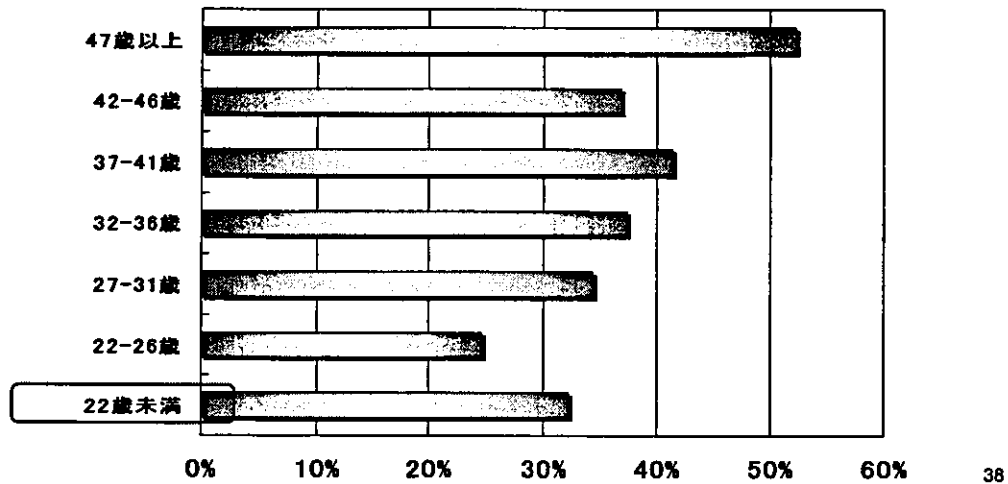


図11. 異性とつきあうことに面倒さを感じるか

はじめてのセックスについて 「かなり重大なことだと感じる」

2004年度全国調査

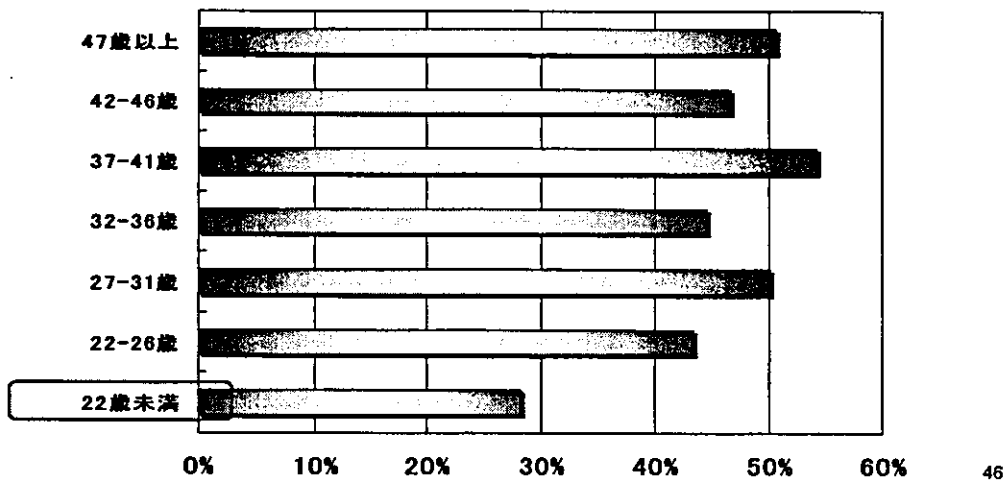


図12. はじめてのセックスは重大なことか

はじめてのセックスについて 「かなり重大なことだと感じる」(未婚)

2004年度全国調査

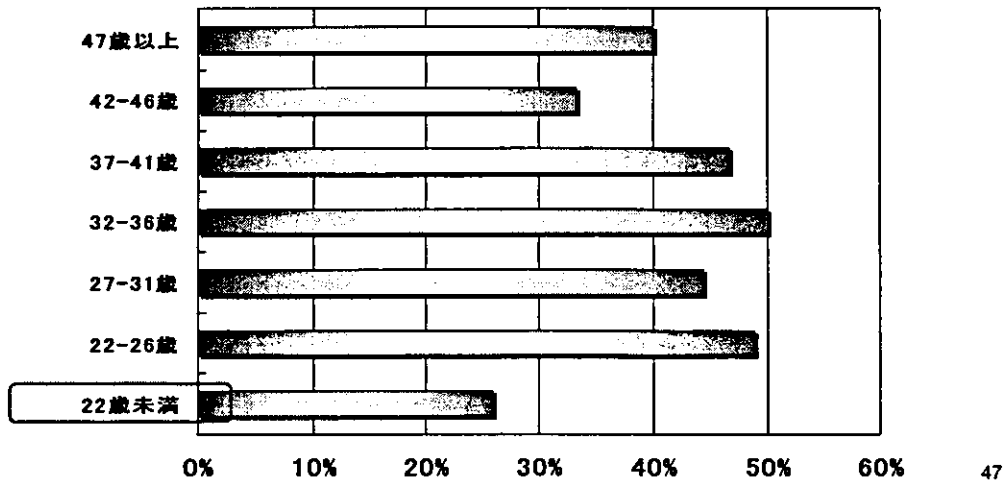


図13. はじめてのセックスは重大なことか (未婚群)

知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援

ハートブレイク

黒瀬 清隆

黒瀬久美子

はじめに

2002年度の厚生労働省と(社)日本家族計画協会の共同研究「男女の生活と意識に関する調査報告書」において、「中学生の頃までに日常親と子が話しをする機会を得ていた子どもは、性行動開始年齢が遅くなり、責任をもった行動がとれるようになる」という調査結果が出ており、子どもの性行動と親子のコミュニケーションの関連性を再認識させられた。

しかしながら、知的しょうがい者は①記憶力が乏しい、②思考プロセスの抽象レベルが低い、③行動の形態や思考操作が単純、④象徴的機能の抽象的レベルが低い等の特徴に該当するケースが多いことから「親子のコミュニケーション」や「男女のコミュニケーション」において健常者以上に困難性を持っているのが現状である。

99年に東京都が18歳以上の障害者を対象に実施した「障害者の生活実態調査」(複数回答)によると「障害のために諦めたり妥協したこと」の質問に、知的しょうがい者の4割以上が「異性との付き合い」「結婚」を、2割以上が「出産」を挙げている。身体しょうがい者の場合では、これらの答えは3～7%に過ぎず、知的しょうがい者にとっては「恋愛」のハードルが高いという現実がしめされている。

知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援は「寝た子を起こすな」と言われ続け、体系的なセクシュアリティ教育が実施されているケースはあまりにも少ないのが現状である。実施されて

いる場合でも、衛生面や性に関して起こりうる危険性などごく限られた情報提供でしかなく、積極的な教育とはいいがたいものが大半である。仮に学校教育の中でセクシュアリティに関する情報が提供されたとしても、それだけで十分といえるだろうか。彼らは学校を卒業した後、地域で暮らし始めるが、そうなるとセクシュアリティを継続的に学ぶ機会は皆無となってしまう。社会にでた彼らのまわりには性的好奇心を煽る情報が溢れており、容赦なく五感に飛び込んでくる。

また、彼らと接する人たちがセクシュアリティに対して誤解や偏見を持っていると否定的な態度になり、あいまいな行動をとってしまう。例えば、「知的しょうがい者」の性行動はすべて「問題行動」と捉えてしまい、その行動を禁止し、抑圧することによって問題を解決しようとする。こうした対症療法での解決は、あくまで一次的なものであり、後日同じことがくりかえされるケースが多くみられる。

そこで「SEX する・しない」「結婚する・しない」「子どもをもつ・もたない」に関わらず、「自分自身を肯定的にみとめられる力を養うこと」「人と共生して生きる力を広げること」を課題に「夢と希望をなくすのではなく苦勞しながらも希望をもって生きていけるきっかけのひとつとなるのがセクシュアリティ支援(教育)」という考えを基に試行錯誤しながらのハートブレイクのアプローチが始まったのである。

1, 連続講座の実施

- 2000年6月～2001年2月 [当事者13名・支援者13名]
知的しょうがい者への豊かなセクシュアリティ支援 コリアボランティア協会 6回
- 2002年7月～2004年2月 [当事者6名・支援者2名]
知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援 バンジーII 26回
- 2003年4月～11月 [当事者8名・支援者10名]
知的しょうがい者と支援者への「性のワークショップ」 NPO法人EPO 10回
- 2004年4月～6月 [当事者9名・支援者17名]
知的しょうがい者と支援者への「性のワークショップ」 CILくにたち 6回
- 2004年4月～12月 [当事者14名・支援者13名・実習生2名]
知的しょうがい者と支援者への「性のワークショップ」 NPO法人EPO 9回
- 2004年4月～ [当事者4名・支援者3名]
知的しょうがい者への結婚支援 バンジーII 16回 (注、2005年2月末まで)

これらの講座は実施主体である施設や団体から講師依頼を受け、連続講座として2000年から実施している。しかし、これらの講座を実施してもセクシュアリティ支援へのきっかけづくりにすぎないと考えている。受講者である当事者や支援者からも「もっと勉強したい」「あれだけではつまらない」とステップアップした講座の開催を求められ続けている始末である。

しかし、講座のなかで経験した「性に関する勉強・質問・会話」は彼らの雰囲気を変えていったのは事実である。性に関する知識は、テレビ・雑誌などのマスメディアや先輩・友人たちからの情報により我々の予想以上に得ていた当事者たちであったが、それらの知識は不正確であったり誤って覚えていたケースが多く存在していた。本来なら親や支援者に聞けば済む事が大半なのであるが、性に関しては「聞いてはいけないこと」という雰囲気がほとんどであり不正確な知識のまま性行動をしてトラブルに巻き込まれたり、性行動そのものを嫌悪視して避けていたりしていたのである。

ハートブレイクの講座では「明るく」「楽しく」を基本に、カラダの基本的な知識から洗い方まで伝え、性の知識では対話方式により知りたがって

いる事項について答えるようにしている。結果として彼ら自身の性の自己コントロールにつながり、不必要な嫌悪感や拘りが減少し、諦めかけていた将来の恋愛や結婚への願望が実現可能なものとして考え始めたのである。

一方、支援者たちはどうであったか。講義中にAさん(当事者)は自分にとって興味のわからない話になるとすぐに部屋を出て行く。支援者であるBさんは彼を連れ戻したいと考えいろいろなアプローチを続ける。この講座はセクシュアリティ支援のきっかけ作りであり、恥ずかしいと感じたり、すでに知っている内容であればあえて聞く必要はないと考えて実施している。つまり、話をすべて聞かせることが主たる目的ではないのであり、Aさんは興味をもてるころになれば戻ってくれば良いのである。何故BさんはAさんを連れ戻そうとするのであろうか。

聞きたいことや興味があることはAさんとBさんとで当然異なるのであるが、Bさんが「この話は聞くべき」「Aさんに聞いてほしい」と考えて押し付けてしまっているようである。つまりBさんはAさんが何を聞くべきか、何を聞かないでも良いのかを決める「指導者」の立場になり、連れ戻すという行動にでてしまったのである。これ

は「価値観の違い」の認識が希薄なときに、支援者がよくとる行動パターンである。

支援者にもっとも大切なことは、当事者が何に関心を持ち知りたがっているのか、何に反応し、何に目を輝かせるのかを掴み取ることである。Aさんが講義の途中で部屋から出て行ってたとき、「連れ戻そう」ではなく「Aさんの心に何が起ったのか」を考えることが大切なのである。

支援とは当事者を連れ戻すことや、言葉をかけることや、何かをさせることではなく、彼らの心と向き合うことである。だまってそばにいること、言葉をかけなくてもその場に心休まる雰囲気を作るのも大切な支援の一つである。しかし「私はこんな支援をしています」という目に見えるものを求めがちであり、その場で待っているのは支援とはいえず仕事をしていないのではないかという不安が出てくる。出て行ったものを連れ戻すのは支援者の「自分は仕事をしているのだ」という満足感のためであって、当事者は連れ戻されることを望んでないのである。

セクシュアリティ講座は、いくら実施しても支援者が「指導者」の視点のままであれば、次のステップに入ることはできないように感じる。

講座を実施して見えてきたことは、知識は得たけれど支援の基本がなかなか身につけていかないう支援者たちの姿であった。

2. 当事者と支援者同時進行の意義

語り合える関係性づくり

「セクシュアリティの勉強」という同じ目的を持ち当事者と支援者が同時に参加しているので、会場のみならず施設に帰った時も、性について話し合ったり相談しやすい関係性がうまれてくる。

生活支援としての意識づけ

宿泊研修時は食事・排泄・入浴(大浴場は最高の体験学習の場)睡眠・・・と生活をともにすることで、それぞれの(支援者も含め)生活習慣・リズムが見えてくる絶好のチャンスである。そして自然に今まで学んできたことを確認する場ともなる。生活そのものとセクシュアリティの結びつきが解かるとともに、親密感や信頼感がより一層増し、いろんな場面をとおしてお互いの距離間を学習していけるのである。

「みて・きいて・ふれあって・かんじて・語りあえる」という当事者と支援者同時進行していくことは、当事者だけ支援者だけの講座では得られない何倍もの効果があることが確認できている。

3. 地域で取り組む意義

スウェーデンでは1986年新援護法誕生により施設から地域への流れが定まり、知的しょうがい者の自己決定権の尊重が世界ではじめて明記された。

ここにはノーマライゼーション⇒自己決定の権利⇒当事者参加・参画という一連の流れがある。また、1988年には施設全面解体の方針でている。ここにおいては、施設解体をどのように進め、どのくらいの地域グループホームをどこに建てるかだけでなく、知的しょうがい者たちが社会生活をおくる上でどうしたら生活の質を高めることができるのかをも要求されていた。

日本では1989年にグループホームの制度制定ができたが「施設信仰」は根強く「ノーマライゼーション」という言葉だけが一人歩きをしている状況は現在も残っている。「どこに住みたいのか」「だれと暮らしたいのか」「なにをしたいのか」などの問いかけを知的しょうがい者本人にしている行政・団体・支援者・親・・・はど

のくらいあったのだろうか？あるのだろうか？

2004年2月宮城県知事によって、「施設への入所は知的しょうがい者本人が自ら選択したものなのか？普通の生活は地域の中にしかない」と全国に先駆け「みやぎ知的障害者施設解体宣言」がなされた。ようやく地域であたりまえの生活をめざす第1歩を踏み出し、建前と本音の垣根をこえた「地域生活支援のあり方」を問われはじめている。

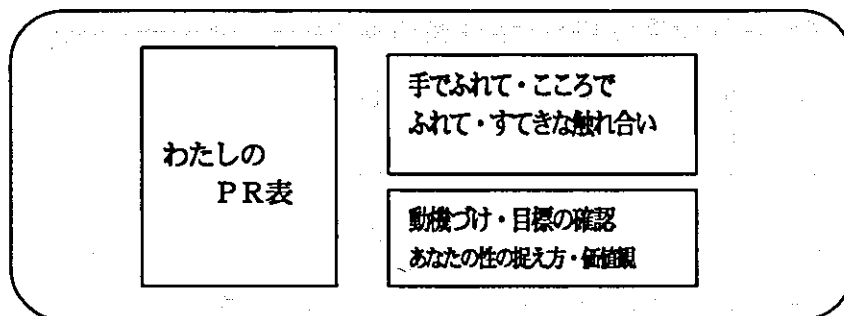
そして今、男女間のコミュニケーションスキルの向上は、知的しょうがい者にとって大きな課題のひとつとなってきた。

4. 支援の実際 [ワークショップ]

「知的しょうがい者へのセクシュアリティ支援プログラム」モデルケース
前半5回を「自分を知るために」、後半5回を「パートナーをつくるために」と位置づけ実施した支援プログラムを示しながらセクシュアリティ支援の内容の一部を述べる。

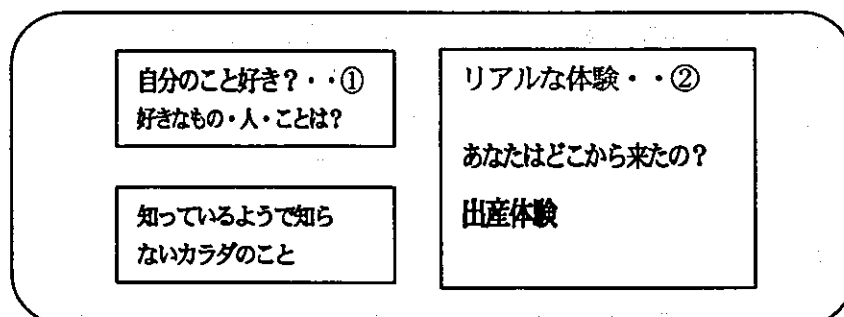
自分を知るために(1)

当事者
第1回
支援者



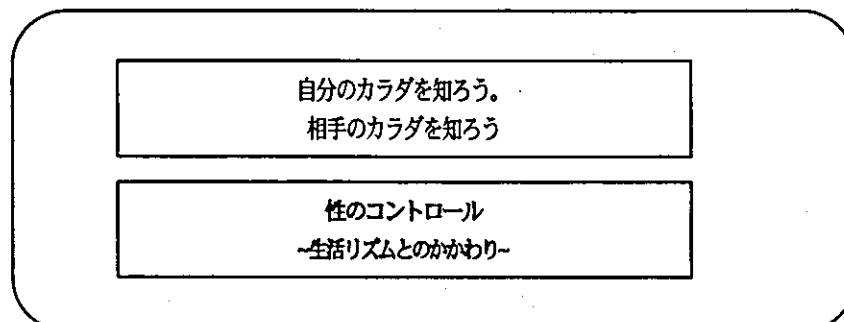
自分を知るために(2)

当事者
第2回
支援者



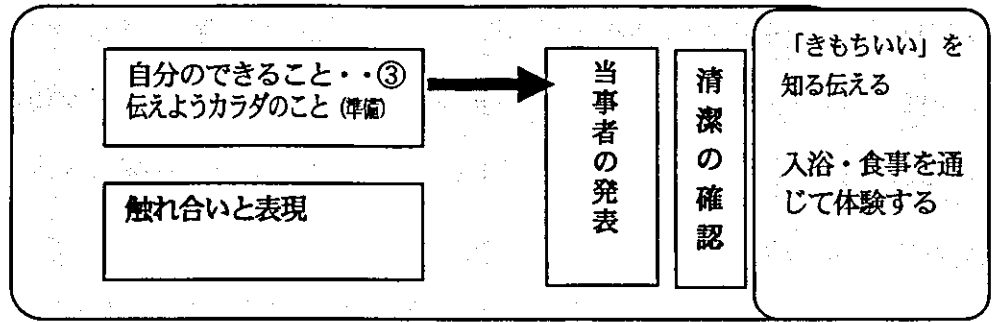
自分を知るために(3)

当事者
第3回
支援者



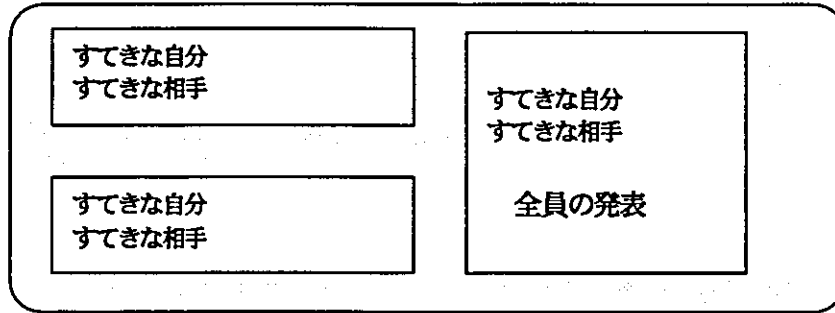
自分を知るために(4)

当事者
第4回～
宿泊一日目
支援者



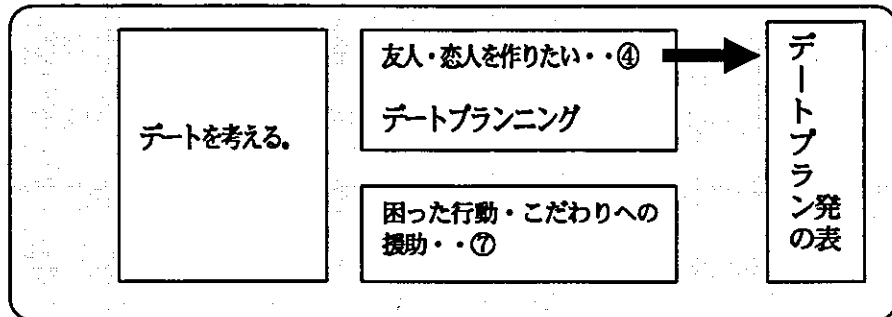
自分を知るために(5)

当事者
～第5回
宿泊二日目
支援者



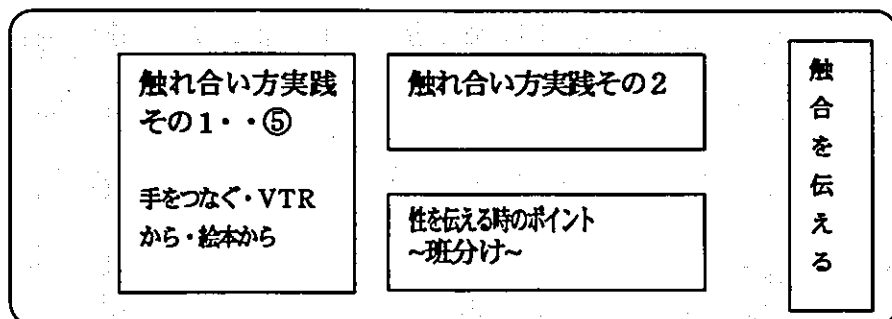
パートナーをつくるために(1)

当事者
第6回
支援者



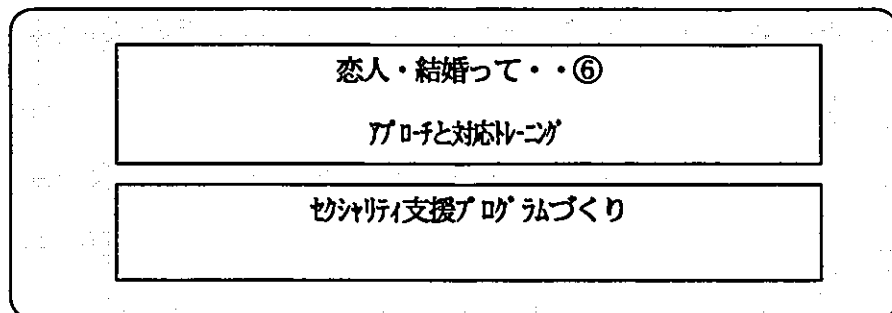
パートナーをつくるために(2)

当事者
第7回
支援者

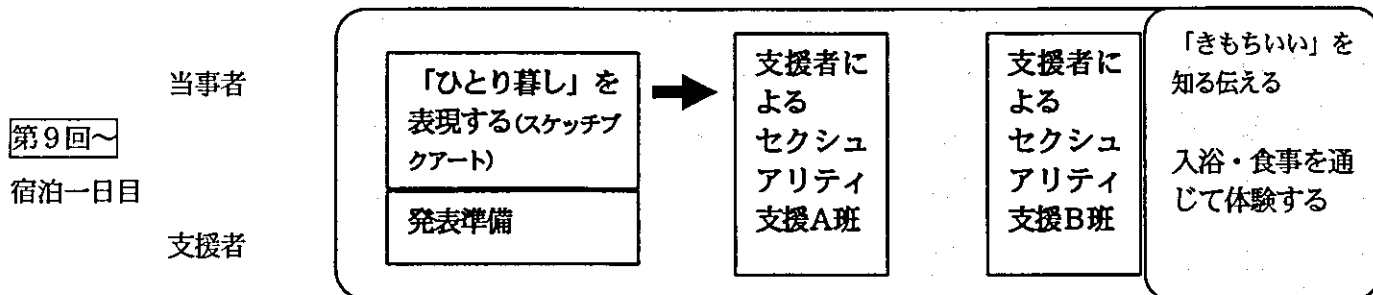


パートナーをつくるために(3)

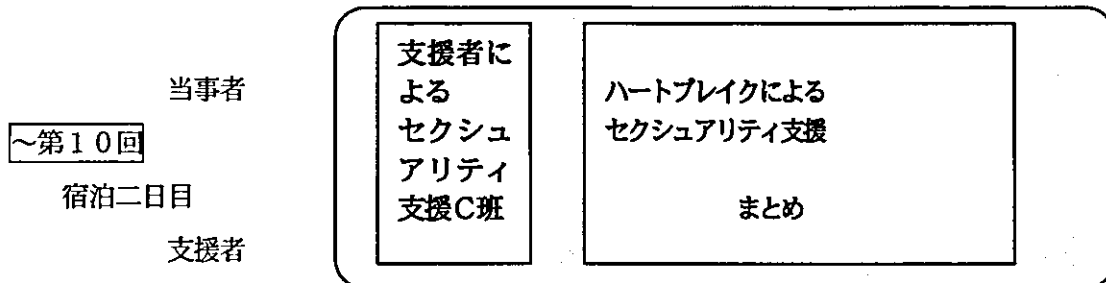
当事者
第8回
支援者



パートナーをつくるために(4)



パートナーをつくるために(5)



①自分のこと好き?～感情表現の第一歩～

テーブルに色・柄・大きさの異なるハート形のクッションを置く。これは「好き」な気持ちの大きさを表すためのものである。

そしてスクリーンにはタレントたちの顔が次々に映し出されていく。

(講師)「この人、好きですか？」

(当事者)「好きで～す」「この人、誰？」

(講師)「好きにもいろいろありますね。このタレントさんが好きな人はどのハートくらい好き？」

当事者は「好きの大きさ」に見合うハートを選ぶのである。次にこのワークショップに参加しているAさんの笑顔が映し出される。

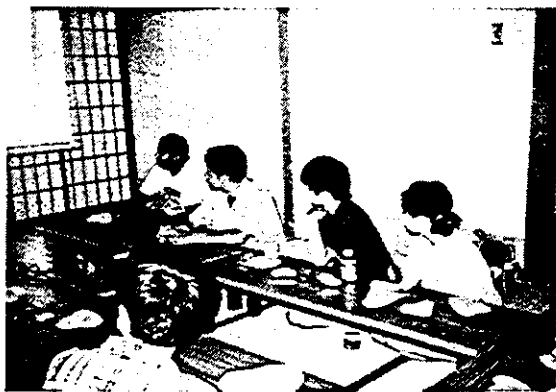
(講師)「Aさんのこと、どのくらい好きですか？」

「Aさんはやさしいから好きです」と大きな赤いハートを選ぶBさん。照れるAさん。

今回は参加していないがよく知っている支援者DさんやEさんなども次々に登場する。



ハート形クッションのようなアイテムを用いると、相手との距離感、親密さと行動を一致させるトレーニングができる。小さなハートの人とは挨拶をするだけ、真っ赤な特大ハートの人とはハグもOKというふうに微妙な表現がしやすくなっていく。このような取組みを経て「ふれあいた実践」へ進んでいけるのである。



身近な人が映るとハート選びも真剣になってくる。とくに異性に関しては、「なぜ、そのハートなのか」理由を恥ずかしそうに発言したり、戸惑いながらもいろんな「好き」について考えていく。

自分の存在を肯定し、周りの「おめでとう」「頑張ったね」という共感と励ましにより、自信あふれる笑顔になる体験を目にしてから、ハートブレイクでは親子性教育やしょうがい者ワークには必ず取り入れるようにしてきている。



浮き輪を連結させて産道を表現した大型教材で、生まれてきたときのことを追体験します。産道を回旋して出てくる赤ちゃんと同じように、体をローリングさせると進みやすい。みんなで「がんばって！」と応援したり、出口では「おめでとう！」と拍手も起こる。

②リアルな体験～自己肯定感をもつ～

当事者の中には母子家庭で育ってきた人・施設生活が長かった人・いじめや虐待をうけてきた人・マルトリートメント（不適切な養育）を受けてきた人など、心に傷を受け自分が生まれてきたことや存在感を肯定的に受け取っていない人がいる。

3歳までの記憶は、何かわからない感覚だけで言語化できないが、3歳を過ぎての体験は言語化できるので聴いてもらえると処理ができ、癒されるというが、知的なハンディを持つ人は言語化が難しい状況が多い。

そこで、自分が始まったころ（受精卵だったころ）には、着床する場所を決めてもぐり込み、絨毛^{じゅうもう}を伸ばし胎盤を作り上げていった話をする。その頑張りは自分のすばらしさとして実感できるものであるし、そのころから自分を支えてくれていた人がいるという意識（孤独・孤立していない）も同時に伝える。その後、大型模型を使い自分の力で擬似誕生体験もする。そこでは「やったあ」「頑張った」「生まれ直した」「生まれかわった」などの声のでてくるのである。



怖がったり不安になったりして進めなかったRさんがくぐり終えたときには大喝采が起った。これこそ出産の喜び。その感動的な瞬間、参加者のあいだには一体感が広がっていた。Rさんは自信がついたのか、以後の講座では積極的に発言する姿が見られた。

③自分のできること ～生かし合う～

当時者たちが支援者からだ（性器）のことをレクチャーするというプログラムは彼らに大きな自信がもたらされ、支援者は彼らの新たな一面を発見する機会となった。これは性器の名前を言えるようになることが主たる目的ではなく、自分でできることを見つけ、その役割を果たすことによって自信をつけるためのプログラムである。全員が平等に言わなければならないわけではなく、言いたくない人はほかの役目を探して遂行すればOK。強制されることはない。何かひとつのことをしようと思ったらすべて自分でやらなければならないのではなく、苦手なことは他の誰かにしてもらい、そのかわりできることをするという、相手と折り合いをつけながらお互いを生かしあう大切さを体験する。



④恋人つくりたい

～デートって何？～

世間のカップルたちはどんなデートをしているのか？ 繁華街を歩くカップルの写真をプロジェクターで映し出す。腕を組んだり、寄り添って

いたり、映し出された仲睦まじいカップルを見て…なんとなく「デート」のイメージが浮かんでくる。

デートプランニングでは、参加者の意見をワープロ入力し、それをプロジェクターで大画面に映し出す。この方法にすると、声（聴覚）＋文字（視覚）として、よりイメージしやすい状態になる。

誰とデートしたい？／どこに行きたい？

／そこで何をしたい？／なにか食べる？

／その費用は誰が払うか？

デートはひとりでするものではないため、相手の希望も取り入れながらプランニングしなくてはならない。デートをするためにはお互いに折り合う気持ちが大切だということがわかってくる。



デートのイメージをより実感するために・・・

【デートウォッチング】

～映像を見ても自分のこととして捉えにくい～

今まで彼らは見ているようでも見えていなかったということがわかってきたので、写真取材班となり、すてきなカップルウォッチングも実施した。それぞれ一台づつのカメラを手に公園へ出かけた。その結果、しっかりデートというものを確認し、自分もすてきな人と、あのようなデートをしたいというイメージがやっと膨らんできたのである。

パンジー取材班

自分でできる

障害者中心の自立生活支援ネットワーク

セクシャル・アイデンティティ講座

すべてがわかる！ウォッチング



⑤触れ合い方実践

VTR・絵本・写真を見ながら意見を出し合う。また、ぬいぐるみなどで、挨拶・握手・手をつなぐ・抱き合うなど、いろいろな触れ合い方のパターンを表現する。そして、恋人同士の親密な触れ合いについて考えていく。

次に前回作ったデートプランを実行したいとき、また、親しくなりたいと思う相手ができたとときどうしたらよいかを考えていく。

「さて、どんなふうに誘いますか?」「親しくなりたい人に話しかけるとき」という設定でロールプレイをしていく。次は「触れ合い」にもトライ。

まず、手のつなぎかた。握手をするときと同じ手の合わせ方の人もいれば、相手の指と指のあいだに自分の指を入れて、しっかりと合体させるやり方の人も。

では、抱きしめるのはどう?「それは嫌!」「いきなりはあかんよ」・・・など。参加者があるシーンを想定して演じたり、自分も演じてみることでわかりやすくなり、イメージも湧いてくるようで、話が「キス」へ、そして「セックス」へと移っていく。



「好きな人にキスされるなら、どこにされたい?」

「ほっぺ」「口と口」「手の甲」・・・「好きな人とならセックスもしたい」

「自分はセックスしたくないのに恋人が求めてきたらどうする?」

「いやって言うよ」「うーん、しゃあないな、まあいいかって受け入れる」

回数を重ねてきた当事者たちは、メンバー同士の信頼関係もできてきたようで、このようなデリケートな話題にも関心を持って発言できるようになってきた。

次に、寄り添う・ハグする・肩を組む・おでこをくっつける・キスする・抱き合う・セックス・・・とハートの大きさや色(感情表現)に合わせた行動をぬいぐるみを使ってしてみる。しかし、カップル選びからが大変。メンバーとの折り合いのつけ方もここで見えてくる。



⑥恋人・結婚って?

～アプローチと対応トレーニング

「恋人」「結婚」とはどんなものなのか、さらに深く考えていく。

プロジェクターで恋人同士の映像をうつしながら、自由に意見を出し合う。

次に恋人ができ、つきあいはじめたばかりという設定で、さまざまな場面において相手がしてくる質問や要求にどう答えるか、ひとりひとりが考える。

用意された手作りのプロマイドのなかから「この人が好き!」という写真を選び、イーゼルに立